

下肢深部静脈血栓症やエコノミークラス症候群 をご存知ですか？

書式変更: フォント: 20 pt, フォントの色: 薄い青

手術前後の血栓予防について

みなさん、下肢深部静脈血栓症をご存じですか？深部静脈血栓症(DVT)とは、主に下肢(ふくらはぎや大腿部)の深部静脈で血液が固まって、血栓(血の塊)ができて血管が詰まる病気です。できた血栓が遊離したりはがれたりして、塞栓源(血管をふさぐ原因)となります。血栓が静脈の中を移動して肺の血管(肺動脈)に詰まることを肺塞栓症といい、時に命に係わる状況になることがあります。

肺塞栓症はエコノミークラス症候群とも呼ばれています。飛行機の座席でずっと座ったままでいる＝足の筋肉が動かない→深部静脈の血流が悪くなる→静脈血が固まる＝血栓ができる。という流れです。足を動かさなければ血栓も動きませんが、立ち上がった時に足の筋肉の収縮とともに大量の血液が足から心臓に戻り、この時血栓と一緒に流れていくことがあります。血栓は肺動脈に詰まって息が苦しくなったり、胸が痛くなったり、ひどい場合には突然死もあり得ます。飛行機を降りた瞬間、突然の症状が現れるのです。これがエコノミークラス症候群です。もちろんファーストクラスでもじっとしていれば同じことですし電車でも車でも起こります。災害時の車中泊でも起きたことが報道されました。

手術を受けた時や病気で寝込んだ時も、じっとして足を動かさないと血栓ができやすいのです。当科では手術前後に静脈血栓の予防と早期発見に務めています。手術を受ける患者さんに術前に血栓症のスクリーニング(ふるい分け)検査としてDダイマーという数値を測定し、数値の高い患者さんには血栓を見つけるための下肢超音波検査を受けていただきます。Dダイマーの濃度が高いと、近い過去に血栓が存在して溶解したことを示唆します。ただ、Dダイマーは他の原因でも上昇する可能性があるため、数値が高いからといって必ずしも血栓があるわけではありません。

手術中から弾性ストッキングやフットポンプ(ふくらはぎをマッサージする器械)を装着し手術中に血栓ができるのを予防し、術後に血栓リスクが高い方には抗凝固薬(血液を固まりにくくする薬)の皮下注射を行います。そして術後早いうちから足を動かす、立つ、歩行するなどが血栓の予防に重要で、早くから動くことができるように傷の小さな腹腔鏡手術を積極的に取り入れています。

当科でがんの手術を受けた方178人を調べたところ、術前に下肢超音波検査を106例に行い、18例に深部静脈血栓を見つかりました。こうした方も適切な

対応（術前後に抗凝固薬を使用するなど）で問題なく手術ができ、術前に血栓があった方もなかった方も、術後に肺塞栓症を起こした方は 1 人もいませんでした。

手術前後の血栓予防は近年、重要性がより認識されているのです。日常生活においても、同じ姿勢で長時間じっとしていない、適度に足を動かしたり運動したりする、水分補給をこまめにするなど、血栓予防に努めましょう。

【外科診療部長 緒方 杏一】

